木造千手観音菩薩立像（太融寺） １躯

木造千手観音菩薩立像
もくぞうせんじゅかんのんぼさつりゅうぞう

分野／部門
有形文化財／美術工芸品[彫刻]

所有者
宗教法人　太融寺（たいゆうじ）

所在地
大阪市北区太融寺町

紹介
法量 ： 像高 98.5cm

十一面四十二臂の彫眼像で、頭体を通して根幹部は一材から彫出する。

木心は体外にはずすが、割矧ぎ（わりはぎ）はなく、内刳り（うちぐり）も施さないという古風な構造を示す。

像の奥行きは浅く、衣文（えもん）の彫り口は穏やかで上品であり、定朝様（じょうちょうよう）の影響も示している。

制作年代は平安時代、11 世紀後半から 12 世紀と考えられる。

両肩先や脇手、頭上面は江戸時代の修復の際に補われたものである。

用語解説

彫眼（ちょうがん） 木彫像において、眼を彫り出してあらわしたものを彫眼と呼び、これに対し、眼の内部をくり抜き眼球状の水晶・珠玉・ガラスなどを嵌め込んだものを玉眼という

内刳り（うちぐり） 木の干割れを防ぐため、また重量の軽減化のため、像底や背面から内部を

刳ること。一木造りの仏像などでは像底や背面から刳ることが多いが、寄木造りの技法が完成した以後は像内全面に施されることが多い

衣文(えもん) 衣のひだのこと。時代によって特徴がある

定朝様(じょうちょうよう) 11 世紀に活躍した仏師定朝(不明－1057)の彫刻様式。当時の貴族好みの華麗優美な作風が特徴で、平安時代後期の多くの作品がこの様式で作られている